

# 急がず倦まず 佐藤正憲

先生の書に魅せられて、はじめてお手紙をさしあげたのが昭和四年の三月だったから、もう四十年以上前のことになる。入門の希望はいれられなかったが、私の未熟な手紙に対してその後も必ず懇切なお返事いただきました。先生から頂いたお便りは、そのまま私の習字の手本ともなり、何度もくり返し臨書している中に、文を覚えてしまったものもある。この十月、先生は元気で満九十のお誕生を迎えられた。私は長い間に頂いたたくさんのお便りをとり出して一通一通読み返し、先生を懐んで、時の移るのを忘れた。その時々のごまがまざまざと思ひ出され、あらたな感動を覚えずにいられなかった。先生が「急がず倦まず」と書かれたのは、私にそうあれと指示されたのではなく、自戒のことばとおっしゃっ

たのであるが、当然私には強い反省を促さずにはおかなかった。いつもあせている自分、にもかかわらずしばしば倦み怠けている自分がかえりみられるのであった。同じ書中にある「盤根錯節」という語。この語ももちろん先生の日々のご苦辛の中から出てきた実感であった。私は誠に尤もと思惟したものであったが、かえりみて真実私はこの語に示されたような苦しみを苦しんで来たといえるであろうか。思うように筆が動かないで困っていることは、今日だつてそうで、苦しみが無いというのではないが、先生が闘ってこられた苦しみはこんなものではなかったに違いない。つづいて「やがて天空海潮」とある。これも先生が、そのような境地を将来に望んで当面の盤根錯節に骨身をけずっておられたという

わけのものであったが、若い私は二十年、三十年の前途には、私にもそのような境地がひらけてくるような思いに耽ったものである。残り時間の少なくなった今日の私にとって、天空海潮など全く夢のようにかないまぼろしに過ぎなくなってしまった。今や、じつくり腰を落ちつけなければならぬと知りながら、反対にせきたられる日々。こう考えてくると「急がず倦まず」「盤根錯節」を経て、やがて「天空海潮」という境地に達するという、段階的進程として、これらのことばを受けとっていたのは、どうやら違っていたようである。「急がず、倦まず」という日々は、いずれの一日も「盤根錯節」でない日はなく、「盤根錯節」の真只中で「急がず、倦まず」という基本的な構えが身についたとき、あるいは「天空海潮」というに通ずる新しい境界が見えてくる、こういった底のものではないだろうか、すなわち、一つが成るときは他も成就するというような意味で、ゴールの標識として考えるべきであるように思われてくるのである。

もう一人の、私の尊敬する先生は、よく「書は心もちだ」とおっしゃった。いかにも思つてきくのだが、「心もち」とはなんだと自問すると分らなくなる。先生はよい書をほめて、「自由だ」とおっしゃったり、「とらわれない」とおっしゃったりする。この方はいくらか分かるような気がする。「心もち」といういい方は総括的であり、「自由」とか「とらわれない」という方は、何か実際の書蹟について述べられた場合、いくらか具体的になつてくる。「心もち」という語はどうもむずかしい。古語に「書は心画なり」とある「心」の意味は、先生の「心もち」と同じかもしれないが、「心正しければ筆正し」という場合はちよつと違つように思われる。最初に書いた先生は「無心」ということをよく言われた。修行の果てに悟りを得て我執を去るといつても容易のことでなく、いささか酔を買つて無心にちかからんとした古人のあとをまねてみたりするというようなこともおっしゃつたことがある。

いつか入院療養中の友人を見舞おうと、

ある病院にいった。フロントの一隅の掲示衝立に掲げられた入院患者の名札を追つて友人の部屋を求めた。幅一・五センチ、縦一〇センチほどの、鶯茶の名札は白いごふんで書かれ上から横に、幾段にも並べてはめられていた。友の名は第一段になく、第二段にもなかった。さらに下の段に眼をうつして、おやつと思つた。今まで気がつかなかつた名札の筆蹟のすばらしさにびっくりしたのである。友のことはしばらくおいて、上の段から再び見直した。楷書できちんと書いてあるというのではないが、実にいい書になつてゐる。らくで何のくつたきもない。先生の「自由」だという、あれだ。「無心」というのは、これだ。こんな書を、こんな場所で発見するとは、とひとりで緊張して立ちつくした。

事務のだれかが書いたに違いないが、だれだろう。入退院係の窓口に行つて四十を越えたと思われのおばさんに尋ねると、「え、間違つてますか。」とびっくりしてゐる。「それでは、あなたが書くのですか。」……以下おばさんとの問答である。

「字が違つて。」「いや、そうじゃない、あまりみごとなんで。」「人をからかうもんじゃないやありませんよ、私の字がいいなんて。習つたこともないし、ほめられたこともない。読めればいいつていわれてますから、ただ書きなぐつてゐるんで。」「いや、すばらしい。あなたは自分でお気づきになつてないんだ。ぼくに何か書いてください。」「とんでもない。墨で書いたことなどありませんよ。」

私は名刺を出し、丁寧に名札を撮映とつ許可を求めた。おばさんはあきれたような顔をしていたが、その時の焼付は今も大切に保存してゐる。無心で書くからおばさんにあのような字が書けたのである。手習いはすればするほど無心から遠ざかつて行くような気もする。あれから十年以上になるが、今は、あの病院に行つても衝立は使つていない。おばさんは元気で勤めてゐるが、あのような名札をまた見ることもできない。

(昭四七・一一・二四)